令和４年度　学校経営計画に対する中間評価報告書

石川県立輪島高等学校　定時制

重点目標		具体的取組		実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果、課題、改善策等）
１	学ぶことのよろこびの実感 〔主担当〕 学力向上G	①	一人一台端末を利活用した授業の展開	一人一台端末の利活用により、意欲的に学習に取り組めたと感じた生徒が Ａ：８０％以上 Ｂ：６０％以上 Ｃ：５０％以上 Ｄ：５０％未満	B （７５．０％） (昨年度 83.2%)	成　果：一定程度の効果は認められるが、昨年度より数値が下がった。 課　題：昨年度と活用方法があまり変わっていなかったり、中学校で既に使用している１年生に十分活用を実感させることができていない。 改善策：教員側が一人一台端末を活用した授業づくり推進事業のオンライン視聴や校内外の研修等により、各教科に応じたより有効的な活用方法を身につける。
		②	授業内容の工夫を図る校内外の研修	授業に主体的に取り組んだ生徒が Ａ：７０％以上 Ｂ：６０％以上 Ｃ：５０％以上 Ｄ：５０％未満	A （８３．３％） (昨年度 77.4%)	成　果：あくまで生徒の自己評価であるが、数値としては、この４年間連続して向上が見られる。 課　題：昨年度より数値が上がった。生徒の能力に応じた指導が効果を上げていると考えられる。 改善策：個々の生徒については、学習への意欲がなかなか持てない者もいるので、そうした生徒を取りこぼさないよう、教科間で情報共有し、引き続き生徒の興味を引き出す工夫を重ねる。

学校関係者評価委員会の評価	・GIGA スクールで端末の活用が進んでいるのは結構だが、デジタル一辺倒になって、生徒の発言する力や書く力がおろそかにならないように指導してほしい。 ・スマホを使っているので、デジタルには慣れているが、キーボード入力はできなかったりする。 ・ＩＣＴの有効性が発揮できない教科もあると思うが、引き続き効果的で興味を惹く活用法をお願いしたい。
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策	・コミュニケーションツールとしての利点を生かし、まずは発信することを苦に感じないようにする。キーボードで入力した内容や書いたりした内容を発信する機会を多く設定し、バランスよく指導していく。

重点目標		具体的取組		実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果、課題、改善策等）
２	社会人基礎力の向上 〔主担当〕 キャリア教育G	①	日常的な挨拶・言葉遣い指導	来校者や職員に対し自ら進んで挨拶をしていると答えた生徒が Ａ：８０％以上 Ｂ：６０％以上 Ｃ：４０％以上 Ｄ：４０％未満	B （７５.０％） （昨年度 40.4%）	成　果：日常の声掛けや学校行事における指導により、挨拶する生徒が昨年度より大幅に増えた。 課　題：人前で声を発することを苦手とする生徒は依然としている。 改善策：登下校時や授業時などあらゆる機会をとらえて教員側から積極的に挨拶し、粘り強く指導する。
		②	時間の自己管理意識を高める粘り強い指導	全授業の出席率 80%以上の生徒が Ａ：７０％以上 Ｂ：６０％以上 Ｃ：５０％以上 Ｄ：５０％未満	C （５３．８％） （昨年度 66.7%）	成　果：欠席が長期にわたる生徒の数が抑えられているが、出席率は昨年度より下がった。 課　題：昨年度と比べてコロナによる出席停止が少なくなったため数字は例年並みである。依然として、半数近い生徒が 80%に達していない。 改善策：欠時の多い生徒には、個人面談や保護者への連絡を適宜行い、生活面の改善や将来を展望する意識を高めていく。
		③	行事の事前事後指導の充実	自己有用感が高まったと感じた生徒が半数を超えた行事が Ａ：年１０回以上 Ｂ：８回以上 Ｃ：年６回以上 Ｄ：年５回以下	C （６回） （昨年度 7 回）	成　果：総合的な探究の時間や学校行事などを通して、周囲の人たちと協力しながら、自分自身の仕事を成就し、自己肯定感を持つ生徒は着実に増えてきている。 課　題：行事の意義を感じられず行事になかなか参加できない生徒が複数名いる。 改善策：生徒のニーズを把握し、興味関心を喚起する行事を設定して参加を促し、他者と関わる機会を段階的に経験させることで自己有用感を高める。

学校関係者評価委員会の評価	・定時制に通う生徒には、挨拶を強制するとそれを負担に感じてしまう生徒が多いのではないか。 今の時代では子どもから挨拶するのはなかなか難しい。大人からの声かけ、子供を見続ける姿勢をもってほしい。 ・自ら進んで挨拶できる生徒が大幅に増加したことは大変良いことだ。先生方の指導の成果だと思う。今後もあらゆる機会をとらえ指導を継続してほしい。また、家庭や本人との連絡を密にして、欠席の長期化を抑えてほしい。
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策	・決して強制にならないように、自分から挨拶がなかなかできない生徒にはこちらから積極的に声をかけて、さりげなく促すようにしていく。 ・生徒については日頃から、保護者とは授業参観日や保護者懇談日を利用して連絡を密にしていく。また、配信メールやホームページで生徒の様子が保護者に伝わるようにする。

重点目標		具体的取組		実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果、課題、改善策等）
３	地域愛の育成 〔主担当〕 地域理解Ｇ	①	ふるさと学習の事前事後指導の充実	ふるさとに関する体験学習に積極的に取り組むことができた生徒が Ａ：９０％以上 Ｂ：７０％以上 Ｃ：５０％以上 Ｄ：５０％未満	A （９２．２％） (昨年度 75.0%)	成　果：平成２５年度から取り組んでいる里山里海保全活動も今年度で１０年目になりそれなりに定着してきた。 課　題：他の生徒と協働することが苦手な生徒も若干おり、行事を休みがちになりやすい。事前指導にさらに工夫が必要である。 改善策：「里山里海」の意義や実際に行う体験学習の詳細を事前に伝え、根気よく参加を促し、気長に指導する。
		②	協働的に活動する場面設定の充実	体験学習において協働的に取り組むことができたと感じた生徒が Ａ：９０％以上 Ｂ：７０％以上 Ｃ：５０％以上 Ｄ：５０％未満	B （８５．７％） (新規)	成　果：今年度は教員があまり介入せず、生徒だけの班編制を行った結果、生徒同士の横の繋がりが強化されたように思われる。 課　題：協働的に活動することが苦手な生徒への対応が課題である。 改善策：当該生徒の状況に配慮し、無理に生徒の輪の中に入れるのではなく、まず教員との活動で慣れさせて、耐性をつける指導を行う。
４	多忙化改善	①	業務の見直し･平準化による多忙感の解消	月平均の時間外勤務が１０時間を超えない教員の割合が Ａ：１００％ Ｂ：　９５％以上 Ｃ：　９０％以上 Ｄ：　８５％未満	D （６６．７％） （新規）	成　果：１０時間を超えない教員の割合は６名中４名であった。超えた２名についても出張に伴う移動を除けば１０時間以内であった。 課　題：目標設定の段階で出張の見込みをもっと精緻に把握する必要があった。 改善策：校内の業務だけでなく、出張時の時間外勤務について詳細を把握し、次年度の目標設定を見直す。

学校関係者評価委員会の評価	・里山里海保全活動などの外へ出かける取り組みは、リフレッシュにもなり、地域の人と協働したりするなど様々な経験ができるので大変良い取り組みである。今後も続けていってほしい。 ・（難しいことだが）先生方の工夫や努力で、できるだけ時間外勤務の目標時間を超えないようにしてほしい。
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策	・行事に参加できなかった生徒には、行事の様子を紹介する場面を事後に設定し、抵抗感を和らげる工夫をする。 ・出張の移動時間は仕方ないが、職員全員で互いの出張のスケジュールを事前に確認し、出張前後の業務の負担感を減ずるように努める。